

キリストの空中再臨と教会の携挙(その三)



ベレーシート

●これまで二回にわたって「キリストの空中再臨と教会の携挙」について学びました。今回はその第三回目です。空中再臨と教会の携挙という出来事は「奥義」(それが明かされるまでだれも分からない事柄)です。というのは、使徒パウロにはじめて啓示されたからです。イエシュアもそのことに関しては、最後の晩餐の時に、ほんのわずかに触れただけでした。キリストが再び来られることを再臨と言いますが、それはキリストが七年間の患難時代の後に来られる地上再臨のことです。しかし、「キリストの空中再臨と教会の携挙」の出来事は、七年間の患難時代の前に起こる事です。そしてそれは教会にとってはキリストとの結婚式のときであり、祝福された栄光の望みなのです。

●今回の第三回目は、「キリストの空中再臨と教会の携挙」を、「花嫁なる教会を迎えに来る花婿なるキリストとの結婚式」として、それをユダヤ的視点から、すなわち「ユダヤの婚礼のしきたり」という視点から考えてみたいと思います。そのことによって聖書がよりはっきりと見えてくるはずですが、まずは、ヨハネの黙示録 19 章 6～9 節を見てみましょう。

【新改訳 2017】ヨハネの黙示録 19 章 6～9 節

6 また私は、大群衆の声のような、大水のとどろきのような、激しい雷鳴のようなものがこう言うのを聞いた。

「ハレルヤ。私たちの神である主、全能者が王となられた。

7 私たちは喜び楽しみ、神をほめたたえよう。子羊の婚礼の時が来て、花嫁は用意ができたのだから。

8 花嫁は、輝きよい亜麻布をまとうことが許された。その亜麻布とは、聖徒たちの正しい行いである。」

9 御使いは私に、「子羊の婚宴に招かれている者たちは幸いだ、と書き記しなさい」と言い、また「これらは神の真実なことばである」と言った。

(※新改訳改訂第三版では7節の「小羊の婚姻」が、2017版では「子羊の婚礼」に改訳されています。また、「小羊」も「子羊」に改訳されています。)

1. 「子羊の婚礼」と「子羊の婚宴」

●7節の「子羊の婚礼」は花婿なるキリストと花嫁なる教会の「結婚式」を意味します。しかし、9節の「子羊の婚宴」は「その結婚の披露宴、祝宴」を意味します。この二つの出来事は原語も事柄も時も異にしていることを、ユダヤ的視点からお話ししたいと思います。

婚礼=「ホ・ガモス」(ὁ γάμος)、ヘブル語は「ハトゥナー」(הַתּוּנָה)。

「子羊の婚礼」で「ハトゥナット・ハセ」(הַשֵּׁה תּוּנָת הַתּוּנָה)。

祝宴=「ホ・デイブノン」(ὁ δεῖπνον)、ヘブル語は「ミシュテ」(מִשְׁתֵּה)。

「子羊の婚宴」で「ミシュテ・ハトゥナット・ハセ」(הַשֵּׁה תּוּנָת הַתּוּנָה מִשְׁתֵּה)。

●教会にとっての最高の喜びは、花婿なるキリストとの結婚です。天の御父は永遠の昔からそのご計画をもっておられました。つまり、御父は花嫁を与えるために御子をこの世に遣わし、花嫁と「婚約式」をさせたのです。それは「最後の晚餐」の時だと考えられます。この両者は「許嫁」の関係にあったのです。

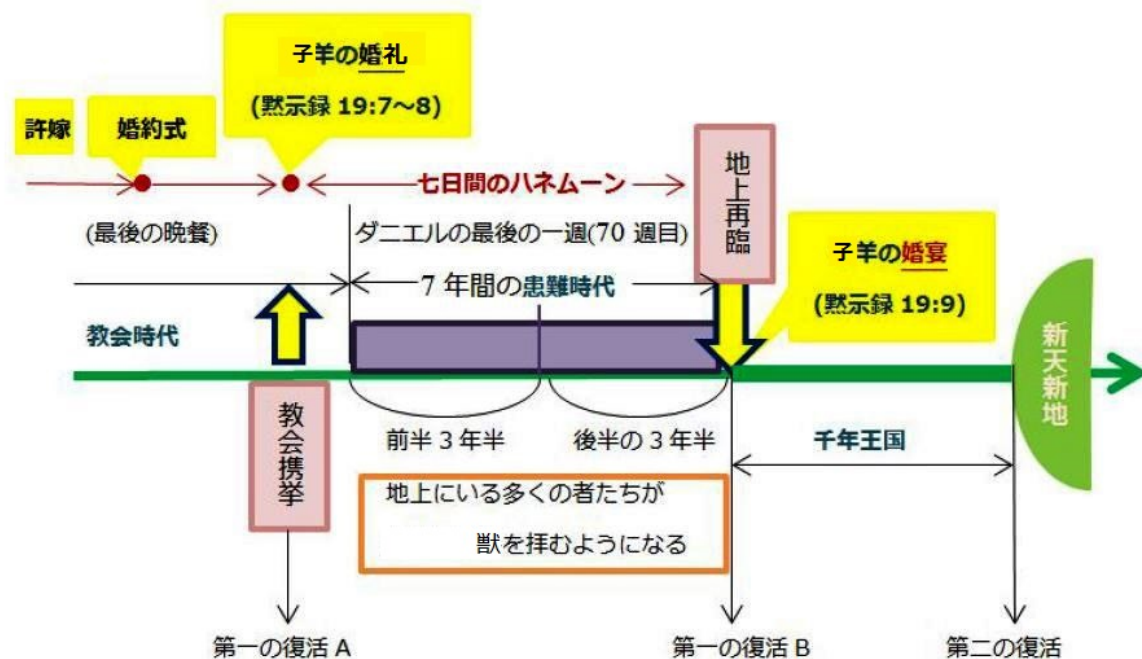
●創世記2章18節で、神である主は、「人がひとりであるのは良くない。わたしは人のために、ふさわしい助け手を造ろう。」と言って、「ふさわしい助け手」を造られました。これによって人とその妻は一体となるのですが、これは御子である花婿と花嫁である教会の麗しいかかわりの、目に見える「型」であったのです。

【新改訳2017】ヨハネの福音書14章1～3節

- 1 「あなたがたは心を騒がせてはなりません。神を信じ、またわたしを信じなさい。
- 2 わたしの父の家には住む所がたくさんあります。そうでなかったら、あなたがたのために場所を用意しに行く、と言ったでしょうか。
- 3 わたしが行って、あなたがたに場所を用意したら、また来て、あなたがたをわたしのもとに迎えます。わたしがいるところに、あなたがたもいるようにするためです。

●この箇所は、ユダヤ的な婚礼のしきたりを知らなければ理解できないところです。最後の晚餐において、婚約式をされたイエシュアは、翌日、十字架にかけられ、それから三日目に復活し、昇天して天に帰られました。しかしヨハネ 14 章 3 節で、「場所を用意したら、また来て、あなたがたをわたしのもとに迎えます。」とあります。「あなたがた」とは、イエシュアの弟子たちのことです。メシアニック・ジューです。そして私たち異邦人は、メシアニック・ジューの弟子たちから伝えられたキリストの福音を聞いて、イエシュアを救い主と信じている者です。つまり、ここでの「あなたがた」とは、キリストをかしらとする「**教会**」のことです。

●確かにこの時点では、「教会」は公のかたちでは聖霊によって誕生してはいません。しかし婚約は「最後の晚餐」の時であったと言えます。なぜなら、その約束は、イエシュアの昇天の際にふたりの御使いによって再度、「ガリラヤの人たち、どうして天を見上げて立っているのですか。あなたがたを離れて天に上げられたこのイエスは、天に上って行くのをあなたがたが見たのと同じ有様で、またおいでになります。」(【新改訳 2017】使徒 1:11)と確認されているからです。つまり、花婿のキリストが、結婚のために、花嫁(妻)である教会を迎えに来ることを言っているのです。



●ヨハネの黙示録 19 章 7 節の「私たちは喜び楽しみ、神をほめたたえよう。子羊の婚礼の時が来て、花嫁は用意ができたのだから」の「**子羊の婚礼の時**」とは、花婿なるキリストが花嫁である教会を迎えに来るその用意が整った時、つまり、天において花嫁を迎える新居の準備ができた時です。御父の許可が下りて、花婿が花嫁を迎えに来るその時を、聖書は「子羊の婚礼の時が来て」と表現しているのです。花婿が花嫁を迎えに来るときには、Iテサロニケ 4 章 16 節に使徒パウロが記しているように、「号令と、御使いのかしらの声と、神のラッパの響きのうちに、(主)ご自身が天から下って来られる」のです。そして、そのとき、主にあって死んだ聖徒たちは、死からよみがえって、朽ちることのないからだを与えられます。また、そのとき生きている聖徒たちも一瞬にして朽ちないからだに変えられて、先の者たちと共に雲(シャハイナ・グローリーの雲)の中に一挙に引き上げられて、主と会い、婚礼(結婚式)が举行されるのです。そうしなければ、天にある新居に花婿と花嫁が夫婦として住むことはできないからです。

●空中において婚礼(結婚式)がなされた後に、花婿と花嫁は天の住まい(新居)へと帰り、そこで七日間(七年間)のハネムーンをだれにも邪魔されずに過ごすのです。そしてこのハネムーンが終わる時、花婿と花嫁は共に地上に来て、ヨハネの黙示録 19 章 9 節にある「子羊の婚宴」がなされると考えられます。

●この時はキリストの地上再臨と重なります。それゆえ、イエシュアは弟子たちに「最後の晩餐」の席で、「過越が神の国において成就するまで、わたしが過越の食事をする事は、決してありません。」(新改訳 2017)と言われたのです。キリスト教会は伝統的に「聖餐式」のときにルカの福音書 22 章 14~20 節を必ず読みます。その箇所を見てみましょう。

【新改訳 2017】ルカの福音書 22 章 14~20 節

14 その時刻が来て、イエスは席に着かれ、使徒たちも一緒に座った。

- 15 イエスは彼らに言われた。「わたしは、苦しみを受ける前に、あなたがたと一緒にこの過越の食事をするを、切に願っていました。
- 16 あなたがたに言います。過越が神の国において成就するまで、わたしが過越の食事をするのは、決してありません。」
- 17 そしてイエスは杯を取り、感謝の祈りをささげてから言われた。「これを取り、互いの中で分けて飲みなさい。
- 18 あなたがたに言います。今から神の国が来る時まで、わたしがぶどうの実からできた物を飲むことは、決してありません。」
- 19 それからパンを取り、感謝の祈りをささげた後これを裂き、弟子たちに与えて言われた。「これは、あなたがたのために与えられる、わたしのからだです。わたしを覚えて、これを行いなさい。」
- 20 食事の後、杯も同じようにして言われた。「この杯は、あなたがたのために流される、わたしの血による、新しい契約です。」

●16節の「過越が神の国において成就するまで、わたしが過越の食事をするのは、決してありません。」

18節の「今から、神の国が来る時まで、わたしがぶどうの実からできた物を飲むことは、決してありません。」

太字で記された「過越が神の国において成就するまで」(新共同訳では「神の国で過越が成し遂げられるまで」)とは、また「今から、神の国が来る時」とは、いったい何を意味するのでしょうか。ここでいう「過越」とは具体的に何を意味し、「神の国が来る」とは何を意味するのでしょうか。

●この箇所は「主の食卓」、すなわち、婚宴での食卓です。つまりその「食卓の時」とは、旧約で約束された御国の到来の時なのです。その時はキリストがこの地上に再臨される時であり、地上に、キリストが王として統治・支配することになる「千年王国」が実現します。この「千年王国」については、時を改めて学ぶことにしたいと思います。

2. ユダヤにおける婚礼のしきたり

●キリストの空中再臨と教会の携挙について、ユダヤの婚礼のしきたり(慣習)という視点から見ると、どのように見えてくるかを考えてみたいと思います。ユダヤには**婚礼のための三つの段階**があります。一つは「許嫁(いいなずけ)の段階」、二つ目は「婚約の段階」、そして三つ目は「結婚式」と「その宴会」の段階です。

(1) 許嫁の段階

●「許嫁」とは、幼少時に本人たちの意志にかかわらず、双方の親または親代わりの者が合意で結婚の約束をすること。ユダヤの場合、結婚を当人以外の者が決定するということが聖書の中にあります。たとえば、アブラハムの息子であるイサクの場合、彼の妻はアブラハムの家の最年長のしもべであったエリエゼルが、アブラハムの親戚の中から選ぶようにと、彼の生まれ故郷へと行かせられます。そして見つけたのが、アブラハムの兄弟ナホルの妻ミルカの子ベトエルの娘のリベカでした。イサクとリベカは許嫁ではありませんでしたが、父親が息子の嫁を見つけるという風習が古くからあったということを示しています。ところで、イサクとリベカの間にも生まれた双子の兄弟エサウとヤコブの場合は、親ではなく、それぞれ自分で自分の妻を捜したことで苦労しています。特に、兄のエサウはカナン人の女を妻として娶ったために、母リベカを苦しめています(創

27:46)。

(2) 婚約の段階

●私たちが良く知っているヨセフとマリアの場合、この二人は「許嫁」でした。ルカの福音書 2 章にはヨセフとマリアが住民登録をするために、ナザレの町からユダヤのベツレヘムというダビデの町へ上って行きました。その箇所「身重になっていた、いいなずけの妻マリアとともに登録するためであった。」とあります(【新改訳 2017】ルカ 2:5)。ここの「いいなずけの妻」というのは少々おかしな表現です。原文直訳では「(すでに)婚約が交わされた妻マリア」となっていて、婚約と許嫁の両方の意味を持つ「ムネーステウオー」(μνηστεύω)の完了受動態が使われています。つまり、「許嫁」であることと「婚約」することが同義であることばかりが使われています。

●しかしここで問題なのは、婚約してただけで身重になっているということは、実は律法違反です。婚約の段階だけでは、マリアは住民登録のためにヨセフと一緒にいくことなどできません。またその必要がありません。登録するということは、その前にヨセフとマリアの二人が結婚していなければなりません。婚約していた時に、御使いガブリエルはマリアに受胎告知をし、ヨセフに対しては、「恐れなくてあなたの妻マリアを迎えなさい。・・・」と告げています。そのお告げを受けたヨセフは、主の使いに命じられたとおりに、マリアを妻として迎え入れたようです(マタイ 1:24)。それゆえ、ヨセフはマリアを連れて住民登録の旅に連れて行くことができたのです。ルカの福音書 2 章 5 節の「**身重になっていた、いいなずけの妻マリア**」という表現は、この時点で、マリアは幼い頃から許嫁であったヨセフと婚約した後に身ごもり、その後、ヨセフの妻となっていたということを物語っています。

●ユダヤの婚約の段階では、花婿が差し出した杯を花嫁が受け取って飲むなら婚約成立です。その後、花婿となる人は結婚するまでの間(おそらく 1 年間)は、花嫁のために身をきよめるために、また酒の席で放蕩に走って誘惑を受けないようにするために、杯を口にしないようです。口にできるのは結婚式を挙げてからです。もし、イエシュアと弟子たちとの「最後の晚餐」が「婚約式」であったとするならば、イエシュアが「これを取って、互いに分けて飲みなさい。あなたがたに言いますが、今から、神の国が来る時まで、わたしはもはや、ぶどうの実で造った物を飲むことはありません。」と言った意味が容易に理解できます。また、ここで「**神の国が来る時**」とは「**結婚する時**」であり、空中再臨と教会の携挙の時なのです。

●婚約の段階でもうひとつ重要なことは、結婚のための資金は花婿の父親が出すということです。新郎の父親が新郎のために、花嫁の父親にそれ相当の結納金を渡すのです。花嫁の白いウェディング・ドレスの費用は父親の責任です。このように、父親は息子の結婚において、幼い時から許嫁を選ぶだけでなく、やがて結婚に備えて、婚約式の時にその資金を支払うのです。そのあとで、息子の新郎は結婚後の新居の準備を父親の管理の下ですることになります。つまり、父親の OK が出ないうちは、花婿は自分勝手に花嫁を迎えに行くことができないのです。ですから、結婚の日がいつかということは、花婿にも分からないというわけです。

●イエシュアは最後の晚餐の時に、弟子たちに「わたしが行って、あなたがたに場所を用意したら、また来て、

あなたがたをわたしのもとに迎えます。わたしがいるところに、あなたがたもいるようにするためです。」(ヨハネ 14:2~3)と言われました。イエシュアが天に戻られたのは、花嫁と共に住む新居を備えるためです。当時のイスラエルでは、一旦婚約が確定すると男性は実家に戻り、結婚式に備え始めます。伝統的には、一年後に式が持たれることになっていました。畑を備え、耕し、作物が植えられ、父の家に妻を受け入れる準備として部屋が作られます。彼が花嫁を迎えるために、万全の配慮と取り組みがなされ、すべてのことに細心の注意が払われました。マリアが身重になったことをヨセフが聞かされたのは、この婚約後であったのです。

(3) 結婚の段階

●いよいよ、父親のゴー・サインが出てから花婿は花嫁を迎えに行きます。すでに花嫁を迎える準備が万端に整えられています。花婿は多くの友を連れて花嫁のところに出かけます。花嫁もすでに準備が整っています。いつ来られても良いように、花嫁はウェディング・ドレスを着ながら待っています。花嫁もその結婚を祝う仲間たちの音を聞くと、素早くベールをまとい、花婿に会うために通りへと案内されます。花婿と花嫁は道路の途中で出会います。そこが結婚式の場です。大きな音とお祭り騒ぎの中で結婚式がはじまるのです。

●ユダヤでは「フッパー」(חופה)という一枚の幕に四つの支柱をつけたものの下で結婚式がなされます。そして結婚式の後に、二人は、花婿が準備した新居で七日間のハネムーンを過ごします。ユダヤでは結婚が非常に神聖なものとして重んじられています。ですから、ユダヤのタルムードには、花婿と花嫁が共に喜び合うために、大切なトラーの学びすら中断しなさいと命じているほどなのです。一週間のハネムーンでは、だれひとり彼らのところに入出入りすることができないのです。結婚の祝宴は一週間のハネムーンが終わってからということになります。ヨハネの黙示録 19 章にある「**子羊の婚礼**」と「**子羊の婚宴**」の違いは、ユダヤの伝統的な婚礼のしきたりから理解しなければならないのです。



ユダヤ人の伝統的な婚礼儀式ウエディングキャペル—chuppahまたはhuppah

3. キリストの地上再臨の時にもたれる「子羊の婚宴」

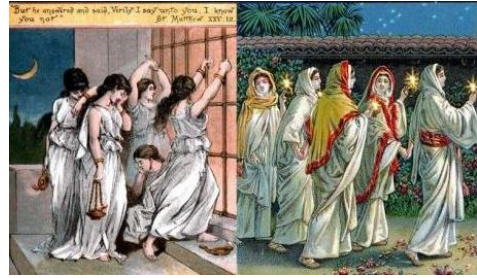
●最後の晩餐の時に、「過越が神の国において成就するまでは、わたしはもはや二度と過越の食事をすることはありません」と言われましたが、七日間のハネムーンの期間が終わると同時に、地上では、悔い改めた神の民イスラエルが、「子羊の婚宴」に招かれます。ここでの「過越」とは、イスラエルを救い出すために「獣」(反キリスト)に対する神のさばきを意味しています。ですから、獣(反キリスト)による大患難に対する神のさばきという「過越」がなされるまでは、主と食卓を囲むことが出来ないということの意味していたのです。

●キリストの地上再臨については、また別の時にあらためて扱いますが、婚礼とのかかわりにおいて語られているイエシュアのたとえ話を最後に取り上げたいと思います。テキストはマタイの福音書 25 章 1~13 節。

「花婿を迎える 10 人の娘—賢い娘と愚かな娘」のたとえ

【新改訳 2017】マタイの福音書 25 章 1~13 節

- 1 そこで、天の御国は、それぞれともしびを持って花婿を迎えに出る、十人の娘にたとえることができます。
- 2 そのうちの五人は愚かで、五人は賢かった。
- 3 愚かな娘たちは、ともしびは持っていたが、油を持って来ていなかった。
- 4 賢い娘たちは自分のともしびと一緒に、入れ物に油を入れて持っていた。
- 5 花婿が来るのが遅くなったので、娘たちはみな眠くなり寝入ってしまった。
- 6 ところが夜中になって、『さあ、花婿だ。迎えに出なさい』と叫ぶ声をした。
- 7 そこで娘たちはみな起きて、自分のともしびを整えた。
- 8 愚かな娘たちは賢い娘たちに言った。『私たちのともしびが消えそうなので、あなたがたの油を分けてください。』
- 9 しかし、賢い娘たちは答えた。『いいえ、分けてあげるにはとても足りません。それより、店に行って自分の分を買ってください。』
- 10 そこで娘たちが買いに行くと、その間に花婿が来た。用意ができていた娘たちは彼と一緒に**婚礼の祝宴**に入り、戸が閉じられた。
- 11 その後で残りの娘たちも来て、『ご主人様、ご主人様、開けてください』と言った。
- 12 しかし、主人は答えた。『まことに、あなたがたに言います。私はあなたがたを知りません。』
- 13 ですから、目を覚ましていなさい。その日、その時をあなたがたは知らないのですから。



●ここに登場するのは花嫁ではありません。この点は重要なポイントです。ここに登場する娘たちは「**婚礼の祝宴**」に招かれる娘たちです。花婿が来るのが遅れたために、その娘たちは眠ってしまいました。賢い娘たち五人は、十分な油を用意していましたが、愚かな娘たちは用意していませんでした。夜がかなり更けてから、花婿が花嫁を連れて地上に戻ってきます。そのとき、油を十分に用意していた賢い娘たちは**婚礼の祝宴、すなわち「メシア王国」(千年王国)**に入ることができたという話です。油を用意していなかった愚かな娘たちはそこへ入ることができなかったのです。この「10 人の娘たち」(賢い娘たちと愚かな娘たち)とは、キリストの地上再臨前の患難期における異邦人の信者と不信者のことです(フルクテンバウム師の解釈)。なぜなら、イスラエルの民(ユダヤ人)は大患難という神のさばきを通して民族的に悔い改め、メシアなるイエシュアの御名を呼び求めるようになるからです。また、ここに登場する娘たちをしばしば「教会」と理解することがありますが、それは「置換神学」による理解です。そもそも一人の花婿が一度に 10 人の娘と結婚することはあり得ません。イエシュアが語られる「天の御国」のたとえ話は、ほとんどの場合、キリストの地上再臨に関連して語られています。教会の携挙についての教えは、後になって使徒パウロが奥義として明らかにしたことです。

●十分な関心をもって主の地上再臨を待つのでなければ、主の救済的な食卓にあずかることは出来なくなってしまおうという警告です。主のことばを信じて、目を覚ましてひたすら主を待つということは、空中再臨の時であっても、また、地上再臨の時であっても、主を待望する者たちの不変の姿勢なのです。イエシュアの初臨の時に、聖霊のお告げを受けてイスラエルの慰められることを待ち望んでいたエルサレムの老**シメオン**は、まさに**時代を越えた「待望の模範者」**であったと言えます。